

西日本諸方言のアスペクト体系の記述をめぐって
—中間報告と今後の課題—

工藤 真由美

I はじめに

I.1 研究の目的

西日本各地には標準語とは異なるアスペクト体系をもつ方言が存在し、これまで様々なかたちでの研究・報告がなされてきた。そして、この西日本諸方言に特有の進行相形式（ヨル、ヨー、ヨン、ヨッ等）と結果相形式（トル、トー、トッ、チョル、チョン、チョッ等）の対立が、ヨル系統が使用されなくなり、トル系統が進行相の意味をもになうというかたちで、大きな変化過程にあるという指摘がある。これは、一般アスペクト論的観点からみて、imperfective aspect と resultative (perfect) aspect が1つの形式に統合化されてしまうという点において、（管見の限り他言語からの報告・記述がなされていないと思われる）極めて興味深い現象である。

現在、(1)西日本諸方言の母語話者であると同時に方言のアスペクトについての研究業績をもつ研究者集団を組織し、(2)統一した記述方法に基づいて、アスペクトの体系的変化が、どの部分からどう始まり、どう進展していくのかについての総合的研究が行なわれつつある。九州方言研究会編 1997『西日本諸方言アスペクトの地域差に関する報告書』（鹿児島大学法文学部木部暢子研究室、非売）は、その第1回目の報告書である。

本稿では、この報告書に基づきながら、同時に東京都立大学、東京大学、名古屋大学、横浜国立大学における筆者の講義に対するレポートをも考慮に入れて、マクロな観点からみて、現在どのような成果が取り出されているかについての中間報告と今後の課題を考えてみることにしたい。

対象となった地域は、次の通りである。

・九州方言研究会 1997

津市（三重県）、姫路市（兵庫県）、岡山市（岡山県）、広島市（広島県）、小野田市（山口県）、北九州市、福岡市東区、久留米市（以上福岡県）、佐賀市（佐賀県）、福江市（長崎県）、松橋町、天草郡（以上熊本県）、大分市、竹田市（以上大分県）

・学生によるレポート

名古屋市（愛知県）、広島市（広島県）、佐賀市（佐賀県）、西伯郡
淀江町（鳥取県）、松山市（愛媛県）、下関市（山口県）、浮羽郡吉
井町（福岡県）

1.2 研究方法

従来の西日本諸方言のアスペクトの記述は、一部の動詞など特徴的要素のみを取り出しての部分的・個別的な考察がほとんどであり、相互の全面的な比較対照が不可能であった。九州方言研究会 1997 は、この弱点を克服し、統一した体系的記述方法によって、西日本各地のアスペクト体系の比較対照ならびにその動態的過程の総合的把握をめざすものである。

そのために、まず実施したのは、次の2点を有機的に組み合わせた記述である。（詳しくは、九州方言研究会 1997 を参照されたい。）

①アスペクト的観点からの動詞分類を次のように行い、動詞のタイプごとに漏れなく記述する。このうち、アスペクトに関わって中心的な動詞のタイプは(a)(b)(c)であり、(d)(e)(f)は、その語彙的意味内容から言って周辺的なものである。

- (a) 主体変化動詞（限界動詞／自動詞） ————— 死ぬ、開く、行く等
- (b) 主体動作客体変化動詞（限界動詞／他動詞） —— 開ける、消す、作る等
- (c) 主体動作動詞（非限界動詞／自・他動詞） —— 飲む、遊ぶ、降る等
- (d) 心理動詞 ————— 思う、怒る等
- (e) 可能動詞・超過動詞 ————— 読める、甘すぎる等
- (f) 存在動詞 ————— おる（いる）、ある

②ヨル系統、トル系統のアスペクト形式はともに、その文法的意味は多義である。従って、次のようなアスペクト的意味について漏れなく記述する。

- (01) 直前（動作開始直前、変化開始直前）
- (02) 過程（動作継続過程、変化継続過程）
- (03) 結果（主体の必然的結果の現存、客体の必然的結果の現存）
- (04) 痕跡（偶然的結果の現存）
- (05) 経験記録（以前の動作変化の効力の現存）
- (06) 反復習慣

それぞれの典型例を簡略化して示すと、次のようである。以下、ヨル、トルの形で代表させることにする。

- (01) {お父さんが冷蔵庫を覗いているのを見て}

- 「お父さんがビール飲みヨル」＜動作開始直前＞
 {崖の上の石が今にも落ちそうなのを見て}
 「石が落ちヨル」＜変化開始直前＞
- (02) {お父さんがビールを飲んでいる最中なのを見て}
 「お父さんがビール飲みヨル／飲んドル」＜動作継続過程＞
 {崖の上の石がごろごろ落ちている最中なのを見て}
 「石が落ちヨル／落ちトル」＜変化継続過程＞
- (03) {崖の下に落ちた石を見て}
 「石が落ちトル」＜主体の必然的結果＞
 {テーブルの上のケーキを見て}
 「お母さんがケーキ作っトル」＜客体の必然的結果＞
- (04) {ビール瓶が空になっているのを見て}
 「お父さんがビール飲んドル」＜偶然的結果＝痕跡＞
 {台所にケーキを作った跡があるのを見て}
 「お母さんがケーキ作っトル」＜偶然的結果＝痕跡＞
- (05) 「お父さんはご飯の時もうビール飲んドル」＜経験記録＞
 「あの子のお父さんは5年前に死んドル」＜経験記録＞
- (06) 「お父さんは毎晩ビール飲みヨル／飲んドル」＜反復習慣＞

II 中間的結果の分析

アスペクト体系の記述にあたって、以上の①②の点を総合的に考慮した結果、浮かび上がってきた成果は、次の点である。II.1、II.2、II.3と大きく3つに分けて述べていくことにする。

II.1 2つの形式（ヨル系とトル系）の有無

(1)まず、注目すべきは、次のように、ヨル系・トル系の2つの形式がある方言と、トル系のみの方言はあるが、ヨル系のみの方言はないことである。

トル系のみ—————津方言、淀江方言、（名古屋方言）
 ヨル系とトル系—————その他の方言
 ヨル系のみ —————*

(2)次に、注目すべきは、形式上、トル系形式のみに一本化されているとしても、その意味内容上は、標準語の（シ）テイル形式とは、次の点で非常に異なっていることである。

- ・主体変化動詞において<変化過程>を表すことができる場合がある。
 {理科の実験で} 「だんだん表面がかわいトル」
 {太郎が今こっちに来る途中なのを見て} 「今こっちに来トル」
- ・主体動作客体変化動詞において<主体の動作過程>のみならず、<客体の結果>をも表す。従って、次のような場合、
 「太郎が窓を開けトル」
 太郎が窓をあけつつあることも、窓が開いた状態にあることも表す。
- ・次のように<痕跡=偶然的結果>をも表す。
 {本に線が引いてあるのを見て} 「太郎が本読んドル」
 {ずぼんに泥がついているのを見て} 「この子はまた畑の中歩いトル」
- ・可能動詞にトル形があつて、<実現状態>を表す場合と<痕跡>を表す場合とがある。
 {今まで泳げなかったのに泳いでいるのを見て} 「泳げトル」
 {英文和訳の回答を先生が添削しながら} 「よう読めトル」

今後、①このようなタイプの方言はどう分布しているのか、②他にバリエーションはあるのか、③完全にヨル系は使用されないのか、その際に世代差はあるのか等について考察を深めなければならない。(名古屋方言では部分的に、ヨル系が使用されるという報告もある。)

(3)ヨル系とトル系の2つの形式がある方言では、両者のアスペクト対立の仕方にいくつかのタイプがある。この点については、次に述べる。

II.2 ヨル系とトル系の対立の型とその連続性

(1)まず注目すべきは、<必然的結果(主体/客体)><偶然的結果(痕跡)><経験記録(以前の動作変化の効力)>は、すべての方言でトル系がになうことである。この点では方言間の違いはない。

「金魚が死んドル」<主体の必然的結果>
 {ケーキが切つてあるのを見て}
 「お母さんがケーキ切つトル」<客体の必然的結果>
 {血跡を見て} 「被害者はここで死んドル」<痕跡>
 「あの子のお父さんは5年前に死んドル」<経験記録>

(2)次に注目すべきは、主体動作動詞(非限界動詞)において、ヨル系とトル系の競合が起こらない<完全な全面的対立型>の方言はないことである。従って、

心理動詞（非限界動詞）では、常に競合が起こる。（下記の図も参照）

「お父さんがビール飲みヨル／飲んドル」＜動作継続過程＞

「朝から雨が降りヨル／降っトル」＜継続過程＞

「早く行こうと思ひヨル／思うトル」＜継続過程＞

以上のような場合、アスペクト的意味は全く同じとみなしてよいのか、あるいは、人称性、話し手の感情評価性、話し手の（認知的）視点等との関係で違いがみられるのかについては今後の課題である。また、今後さらに調査地点を増やすことによって、主体動作動詞においても＜動作継続過程＞がヨル系に限られている方言が見つかる可能性もありうる。（今回の調査はすべて40代以下であるので、老年層の調査等も必要であろう。）

(3)従って、ヨル系とトル系の対立の型を分類するポイントは、＜主体変化動詞＞と＜主体動作客体変化動詞＞という＜限界動詞＞の＜過程＞に関わる。結果は次のようになる。そして、この4つのタイプに限られている。（主体動作動詞も含んだかたちで提示しておく。）

対立の型 動詞のタイプ	全面对立型		部分対立型	
	A	B	C	D
主体動作動詞 ＜過程＞	ヨル トル	ヨル トル	ヨル トル	ヨル トル
主体動作客体変化動詞 ＜過程＞	ヨル	ヨル (トル)	ヨル トル	ヨル トル
主体変化動詞 ＜過程＞	ヨル	ヨル	ヨル	ヨル (トル)

(A) 姫路、小野田、久留米、佐賀、吉井、福江、大分、竹田、松山

(B) 広島1、北九州、松橋

(C) 福岡、天草

(D) 岡山、下関、広島2

<全面的対立型A>は、主体動作客体変化動詞における<動作過程>も、主体変化動詞における<変化過程>も、ヨル系のみで、トル系が使用されない方言である。この方言では、<限界への到達の有無>によって、ヨル系とトル系がアスペクト的に対立している。

「お母さんが窓を開けヨル」<動作過程（限界到達前）>

「お母さんが窓を開けトル」<客体の結果（限界到達後）>

「窓が開きヨル」<変化過程（限界到達前）>

「窓が開いトル」<主体の結果（限界到達後）>

<全面对立型B>は、主体動作客体変化動詞のうちの一部において、<過程>をヨル系のみならずトル系をも使用できる方言である。一步、<部分対立型>に近付いていると言えよう。以下の例に見られるように「台所で」のような形式と共起した場合に、トル系の使用が可能になりやすい。今後、構文的条件の精密な記述が必要となろう。

「お母さんが今台所でケーキ作りヨル／作っトル」

「お母さんが今台所でケーキ切りヨル／切っトル」

「太郎が窓開けヨル／＊」

「お母さんが洗濯物干しヨル／＊」

「生徒が黒板消しヨル／＊」

<部分対立型C>は、すべての主体動作客体変化動詞の<過程>において、ヨル系とトル系の両形式が使用可能な方言である。ただし、主体変化動詞の<変化継続過程（限界到達前）>は、トル系は使用できない。（トル系は、<結果（限界到達後）>を表す。）

「太郎が窓開けヨル／開けトル」

「お母さんが洗濯物干しヨル／干しトル」

「生徒が黒板消しヨル／消しトル」

「金魚が死にヨル／＊」

「バスが止まりヨル／＊」

「石が落ちヨル／＊」

「雪が消えヨル／＊」

「映画を見に行きヨル／＊」

「今こっちに来ヨル／＊」

＜部分対立型D＞は、主体変化動詞の＜変化過程＞をも、一部トル系を使用する方言である。（以下の例は岡山方言の場合である。なお、広島方言は、2人のインフォーマントによる記述が異なり、一人の記述では＜全面的対立型B＞だが、もう一人の場合は、＜部分対立型D＞である。しかも、部分対立型Dの場合、岡山方言の場合よりも、トル系が広く使用できる。）

「金魚が死にヨル／＊」

「バスが止まりヨル／＊」

「石が落ちヨル／＊」 （広島方言の場合、トルも可能）

「雪が消えヨル／＊」 （広島方言の場合、トルも可能）

「映画を見に行きヨル／映画を見に行っトル」

「今こっちに来ヨル／来トル」

(4)注目すべきは、次のような対立型は出てきていないことである。前述の図と比較されたい。

対立の型 動詞のタイプ	*	**	***	****
主体動作動詞 ＜過程＞	ヨル	ヨル	ヨル	ヨル トル
主体動作客体変化動詞 ＜過程＞	ヨル	ヨル トル	ヨル トル	ヨル
主体変化動詞 ＜過程＞	ヨル トル	ヨル トル	ヨル	ヨル トル

この事実は、次のことを示していると考えられる。

- ①ヨル系とトル系の競合は、＜非限界動詞＝主体動作動詞＞から始まる。
非限界動詞での競合がないままに、限界動詞における競合が起こることはない。

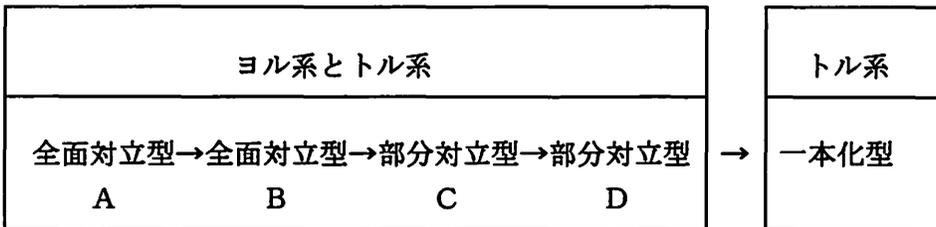
②次に、＜限界動詞＞のうちの＜主体動作客体変化動詞＞に進む。これを飛び越えて、＜主体変化動詞＞に進むことはない。

③最後に、＜限界動詞＞のうちの＜主体変化動詞＞に至る。が、「死ぬ、止まる」等を含めて、完全にヨル系とトル系の競合が起こっている方言は出てきていない。あり得るのかどうか今後調査を行なわなければならない。

ヨル系とトル系との対立のあり方、ならびに＜競合の進み方＞は次のように、＜法則的＞であると思われる。そこに至れば必然的に動作の尽きるべき時間的限界のない動詞において、まずは、ヨル系とトル系の競合が起こり、次に、時間的限界のある動詞に進むことには、理論的にも必然性が認められよう。

非限界動詞 → 限界動詞 → 限界動詞
 主体動作動詞 主体動作客体変化動詞 主体変化動詞

(5)だとすれば、次のような、アスペクト対立の型の連続性が考えられることになる。



この共時的に見た連続性が、歴史的（通時的）に見た連続性と一致するかどうかの考察は今後の課題である。また、標準語の影響が及んでいるのかどうか、及んでいるとすればどのようなかたちでなのかの追求も今後の課題である。

(6)なお、以上のような＜全面对立型A＞＜部分対立型C＞＜一本化型＞という文法的なアスペクト対立の分類は、動詞分類と、次のように相関していると思われる。

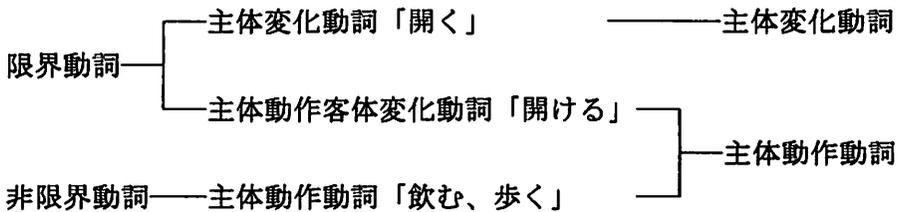
＜全面对立型＞	＜部分対立型＞	＜一本化型＞
限界動詞で対立 非限界動詞で競合	主体変化動詞で対立 主体動作動詞で競合	動詞分類非関与

文法的アスペクト対立のあり方と動詞分類のあり方とは相関する。

<全面对立型>では、限界動詞と非限界動詞への2分類が重要である。一方、<部分的対立型>では、主体変化動詞と主体動作動詞への分類が重要である。そして、一本化型では、標準語と異なり、動詞のタイプによるアスペクト的意味の違いが基本的には生じないとすれば、動詞分類は非関与的である。

<全面对立型>

<部分対立型>



<全面对立型>では、<主体>か<客体>かにはこだわらずに、<(必然的)時間的限界への到達の有無>をめぐって対立する。一方、<部分対立型>になると、<時間的限界>ではなく、<主体の動作>か<主体の変化>というヴォイス的側面に関わって対立する。<時間的限界>が純粋なアスペクト的概念であるとすれば、<主体の動作/主体の変化>は、アスペクト・ヴォイス的概念である。この2つの分類原理の動的関係の把握が今後重要になってくるであろう。

II.3 トル系の安定性とヨル系の不安定性

(1) 以上述べたように、トル系はすべての方言で、<結果><痕跡><経験記録>(以上はすべて一般アスペクト論でいう<perfect>)の意味を保持し、ヨル系の進出はない。その上で、<動作過程、変化過程>において、ヨル系との競合化を起こしている。この意味において、トル系はアスペクト形式として安定していると言えよう。次に述べるような、ヨル系に見られる感情評価性等のモデルな要素との hybrid 性等はみられない。

(2) 一方、ヨル系の方は、次のような点で、アスペクト形式としての位置に揺らぎが見られる。

① 既に述べたように、<過程(動作、変化)>の意味において、トル系との競合化が引き起こされている方言が見られる。

② <直前(動作開始、変化開始)>というアスペクト的意味は、例え一本

化型の方言であろうと、トル系では表せないものである。

{冷蔵庫からビールを出しているのを見て} 「ビール飲みヨル」

{エンジンの故障で今にもバスが止まりそうな時}

「バスが止まりヨル」

{雨が今にも降りそうな時あるいは2、3粒落ちてきた時}

「雨が降りヨル」

しかしこの場合には、「飲もうとしよる、飲もうとしとる、飲もうでしよる、飲もうでしとる」「止まろうでしよる、止まろうとしよる」「降ろうでしよる、降ろうでしとる」のような分析的形式の使用が見られる。ヨル単独では<直前>の意味を表しにくくなる傾向がある。

- ③ヨル系の過去形では、<実現しかけたが現実化しなかった>というアスペクト・ムードの意味が発達している。そしてこの場合、<不都合な動作変化>であるという話し手の感情評価性を伴うことが多い。純粋な時間的段階としての<直前>というアスペクト的意味では使用しない方言が多くみられる。

「もうちょっとで（もうすこしで）死にヨッタ」

「子供がもうちょっとで柿の実落としヨッタ」

- ④広島方言において、それ程頻繁には使用されないと留保しつつも次のような報告があった。③の場合とは違って、動作が実現した場合にはあるが、動作の現実化に対する<話し手の負の感情評価性（不都合性）>が押し出されている点では共通する。

「いらんことしよってからに」（余計な事をしやがって）

「ぶつきよった！」（ぶつけやがった）

この場合、ヨル系形式は、<動作過程>というアスペクト的意味を表してはいず、その意味では脱アスペクト化している。

このような意味用法が、大阪方言等の影響によるものか、あるいは、③の用法との関係から独自に（自立的に）派生してきているのか等の問題は今後の課題である。世代差等の考察も必要となろう。また、英語等の言語における‘modal progressive’等との比較も興味深い。アスペクト形式から広義ムード形式への発展が指摘されているところである。

Ⅲ 今後の課題

以上、マクロな観点から、西日本諸方言のアスペクト体系の記述をめぐっての諸問題を中間報告として述べた。今後、体系内的要因、体系外的（社会言語学的）要因を十分に考慮した調査表を作成し、調査地点も増やして、より精密な記述をめざさなければならないであろう。今回の調査では、動詞分類（語彙的なアクションスアルト）との関係に焦点をおいたが、さらに、テンス、ヴォイス、極性（否定）、ムード等の他の文法的カテゴリーとの関係も重要になってくるであろう。

（以上は、1998年1月10日に熊本大学で行なわれた九州方言研究会での報告に基づくものである。その際に出席者の方々から貴重な教示を得た。記してお礼申し上げます。）

（くどう まゆみ・横浜国立大学教育人間科学部助教授）